
MOTHER2 - Let's save the world -

E-mo

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

MOTHER 2 — Let's save the world
d —

【Nコード】

N0416J

【作者名】

E—mo

【あらすじ】

ある夜オネット郊外に落ちた隕石。それは世界を救う大冒険への、とても大きな切符だった——。そして世界を託された少年少女は、その旅路で、自分にとって大切なものを探してゆきます。

一人は、友情とは何かを。

一人は、大きすぎる力の行く先を。

一人は、家族の愛を。

一人は、王族としての責任を。

これは誰もが成長するに当たって経験し、捨ててしまう、そんなゴミ箱に眠る宝石のような世界の物語。

かのMOTHER2を勝手にノベライズしてみました。原作沿いではありますがオリジナル要素も多数含みますのでご注意を。

隕石の襲来（前書き）

勝手にMOTHER2をノベライズしてみました。原作沿いで、MOTHERとも繋がりがありません。オリジナル要素も多数含みます。ご注意ください。

隕石の襲来

宇宙の狭間、真っ暗闇に点在する星々の光が、呼応するかのよう瞬いています。

その懐は深く深く、そして広く広く、今もお広がり続けています。広大なその世界では、巨大な星も点と点ですらありません。

とてもつなく巨大なギーグの宇宙船ですら、小さなチリも同然。

ゆっくりと流れるように浮いていた宇宙船の中で、ギーグはぽつねんと無音の世界で目覚めました。

広い宇宙船。昔、生まれたてのギーグは研究材料に使用するつもりだった人間二人に育てられました。

彼らは酷く優しく、温かでした。その人だけが知っている、誰も知らない忘れられた子守唄は、ギーグの心を癒しました。

そして、百年近く経った後に成長したギーグは、地球を侵略しようとして、その「歌」を持つ3人の子供達によりギーグから力を、氣力を奪い、宇宙空間に放り込まれたのでした。

母を欲したギーグは、その愛によって自らを滅ぼすことになってしまったのです。

あれからどれくらいの間が経ったのか、そして自分がどこにいるのかも判りませんでした。

ただギーグは、ギーグとして、自身の生まれてきた存在意義を全うするために、近くを漂っていた青く活力溢れる星に目をつけました。その星が侵略目的で近づいたことのあった星なのか、それとも、全く別の星なのか、ギーグには分かりません。

それでもあの星を、ギーグのものにする。それがギーグの意義で、意思でした。

ギーグの目覚めに、ギーグの配下の者達は一斉に集まり出しました。そして、彼らはギーグの力を借り、未来を予知する知恵のリングを作り出しました。

ギーグは完成したその予知マシーンを満足げに見つめると、問いました。

「我が野望の完成は何時ごろか」

「予知シマス。ソレハ今ヨリモ……」

知恵の林檎の言葉はそこで途切れ、びりびりとノイズのような音が入ります。

もう一度リングは言いました。

「予言ハ、不可能デス」

何故だと、ギーグは問いました。

「其ノ成功確立ハ0%」

もう一度、何故だとギーグは問いました。

「貴方ガ野望ヲ果タシタ未来カラ、一匹ノニンゲンガヤツテキマス。ソイツハ目覚メルハズノナカッタ少年ヲ導キ、貴方ノ邪魔ヲサセマス。」

何故だ。三度ギーグは問います。そしてそれを聞いたギーグの部下のスターマン達は、ニンゲンの情報を集めるため一斉に動き始めます。

「予言シマス。子供ガ、4人。地球ヲ救ウ定メヲ背負ッテイマス。彼ラガ存在スル限り、貴殿ノ予言ハ叶イマセン」

何故だ、とギーグは問いました。何故だ。何故だ。なぜだ。なぜだ。なぜだ。なぜ邪魔ヲすル。子供フゼいに何故阻止さレル。なぜ。なぜ。なぜ。

そしてその答えを聞くことも無く、ギーグは自分の殻に籠り、ただひたすらに自身の力を強めました。

ただひたすらに、がむしゃらに、何ものにも代わることなく。

見えないその力は波長となって、世界を覆いつくしてゆきます。

そうやって、ギーグはギーグ自身を、世界に浸透させ、食わせ、食ってゆくのでした。

それは、街もぐっすりと眠りについた真夜中のことでした。

オネットの街はにぎにぎしい一日を終え、静かに寝息を立てながら、どっぷりと明日の夢に浸っていました。

きいんという甲高い耳障りな音と、赤い光が夜空を切り裂いた瞬間、オネット郊外は地震と地響きに襲われました。

そして、オネット郊外の丘のてっぺんは激しく炎上し、20mもの高さまで火を噴き、そしてすぐにそれは収まりました。

オネットの街はずれに住むネス少年もまた、静かに温かな夢を貪っていました。

草野球。オネットグリーンズとツーソンブルーの試合。現在、0－3で負けているグリーンズの攻撃。

9回裏。ツアウト満塁。これは一か八かの、大チャンス。

バッターボックスに立つは四番バッターネス少年。緑の帽子がちよっぴり大人っぽく見える。

ママや妹のトレーシー、それにパパまでもが応援に駆けつけて、ネスの名前を叫んでる。

ママは大好物のハンバーグもお弁当に用意してくれていた。

それと、顔も名前も分からない、3人の子も自分の名前を呼びながら、必死に応援してくれていた。

一人はリボンのすごく可愛い女の子。一人はメガネでいかにもインテリな男の子。

もう一人はちょっと変わった異国風の、ネスたちよりも少し年上らしき男の子。

その声を聞くと、なんだかみるみる力がわいてくる。打てるんじゃないかって思えてくる。

そして、ボールを握るのは、なんとあの太っちょポーキーではないか！

イヤらしい笑い方をしながら、ぐっとボールをグローブに投げ、出方を伺っている。

ネスは踏み込む足に、バットを握る手に、さらに力を込める。

ポーキーは、笑いながらボールを投げる！ネスは狙いを定めてバッ

トを振りかぶった！

いい当たり！大きい、大きい、大きい、ホーーーーーームラン！！

場内は興奮と歓声で湧き上がる！誰もがネスを褒め称え、名前を叫ぶ！だって英雄なんだもの！

皆がネスを取り囲み、ネスは身動きが取れなくなる。

そんな人と人の隙間から、消えていなくなるポーキーを見た。

凄く寂しそうで、辛そうで、はかない背中をしていた。ポーキー。

そして、真っ暗闇に消えていくのだ。その向こうに、赤い目をした何かがいるというのに。

ポーキー、危ない、そっちは……！！

地響きは例外なくネスの家をも襲いました。ネスはベットから転げ落ち、目が覚めました。

夢の内容ははっきりと記憶していました。なんて素敵な夢だったんだろう。

そして、何故あんな悲しいポーキーを夢に見たのだろうか。

ネスにとって、ポーキーは大嫌いな隣人さんの他に、見当たるものはありませんでした。

いつだって威張っていて傲慢ちき。お気に入りのヨーヨーも、ミニカーも、全部ポーキーにとられました。

その癖何かあるとすぐにネスのことを頼っては、面倒ごとを押し付けてきます。

そして、街一番の大金持ち。父も同じように金と権力を振りかざして、町中に我俣を貫き通します。

そんなポーキーですから、近所でも、学校でも嫌われています。

なのに、何故、夢にまで見てしまったのか、ネスは疑問でなりません。

でも、今のネスにはそれよりもっとずっと気になることがあります。

そう、あの地響きの原因。こんな辺鄙なオネットの郊外で、あんな

騒音の原因になるものが普段あるとは考えられません。

ですから、きつと、これは今までに無い何か起きたのでしょうか。

一体何が起きたのだろう。この目で確かめたい！

胸の奥から、どっと沸きあがる何かがありました。

好奇心旺盛なネス少年は立ち上がり、扉を開けました。

寝る前に電気を消した廊下は既に明かりがついており、二つ下の妹のトレーシーがいつもの明るく元気な顔を怯えさせながらうろろさまよっていました。

ネスを見た瞬間、ぱつと嬉しそうに顔色を即座に変え、飛びつくように駆け寄ってきました。

「お兄ちゃん！」

「トレーシー、無事だった？」

トレーシーは小さく頷きます。

「ちょっと机からペン立てが落っこちただけよ。怖かったわ。お兄ちゃんも今の音で起きちゃったのね」

「うん。びっくりしたよ。他に何か壊れたりしてない？」

「うん。平気。」

ネスが来て安心したのでしょうか、トレーシーはいつもの元気な顔色を取り戻しました。

「……目が覚めちゃったな。このまま夜更かしでもしようかな」

「夜更かしって……何するんだい？」

「いいじゃない！そーだ、漫画読みかけだったし、それ読もうかな」
「どうやらトレーシーは、「夜更かしすること」がなんとなく甘酸っぱくて、ちょっぴりほろ苦い、大人びた未知の世界のように思えるようです。」

いつも全身全霊で駆け回り、そして一気にエネルギーをきらしてばたんきゅーと寝てしまうネスにとっては、あんまり理解が出来ません。

ネスは適当に相槌を打つと、そのまま階段をそーっと、ゆっくり、降りました。

なんてったって下にはママが起きてるはず。今から外へ行くって言ったら何を言われるか！

だから出来るだけ、ママに見つからないよう、静かに、静かに、そーっと、外へ出るのです。

が。

「ネスちゃん！」

最後の一段を降りようとしたところで、やっぱりママに見つかってしまいました。

ママの勘は数キロ先の雲の形を当てちゃえるほど、鋭敏です。

「ネスちゃん……外へ見に行く気でしょ？」

……どうせ見に行くなって言っても抜け出して行くんでしょうから、せめて着替えてからいつてらっしゃい」

「……でもすぐ着替えるんだけど……」

「みつともないでしょ」

「……分かったよ」

仕方なくネスは、階段を逆のぼりです。廊下には既にトレーシーの姿はありませんでした。夜更かしの準備に取り掛かったのでしょうか。廊下を抜け、自分の部屋に入ると、ネスはクローゼットからお気に入りの縞々のTシャツと短パン、白い靴下に、赤い野球帽を取り出して早速着替えました。

ぼさぼさの寝癖を帽子で隠し、もう一度ネスは部屋を飛び出します。下の階で、ママはネスが降りてくるのを待っていました。

「気をつけて。すぐに帰って来るのよ」

「わかったよ、ママ」

ネスは出かけ際、玄関の近くでぐうたらしていた白い大きな犬、チビをそっと撫でます

どうやらチビもあの音で起きてしまったようです。

それを確認すると、神経を集中させて、言葉を聴いてみました。

（人も犬も夜は寝るもんだぜ、寝ろよ）

（たまにはいいじゃないか）

そう、ネス少年は生まれつき不思議な力を持っていたのでした。離れたところにあるものを念動力で動かしたり、こうやって動物と会話が出来たり。

それはネスにとって幸か不幸かは分かりません。それが原因で何度か喧嘩になったこともありました。

ちよっぴりいやな思い出が浮かびそうになったネスは扉を開け、外へと向かいました。

初めて吸う深夜の外気はちよっぴりひんやりしていて、なんとなく新鮮な気持ちでした。まだ12歳のネスが普段こんなに遅くに家を出ることはまずありません。

それはさっきトレーシーが感じていた独特で特有の優越感がなんとなく分かりました。

だってこんなに静かなオネットを、ネスは未だ嘗て見たことがありません。

聞こえるのは一部の人間の、喧騒に似た声ぐらい。

ネスは高揚した気持ちを抑えきれぬまま、更なる一步を踏み出しました。

「さっき音がしただろう！」

突然、黄色の服に、こんな真夜中だというのに大きな白いふちに真っ黒なサングラスをかけた男性が男らしからぬよく通る声でネスに声を掛けてきました。

ネスが返事をする間もなく、男は続けます。

「この近所に隕石が落ちたらしいんだ」

「隕石い!？」

「そうだすごいだろう」

何でこの男がこんな風にえぼるのか、ネスには判りません。

「俺が一番に見にきたんだ! なっ、俺が一番に見にきたんだぞ!」

「それより隕石って本当に!？」

「……本当だ! なっ、一番に見に來たって言っただろう?」

「…わ、判ったよありがとう。ぼくも見に行つて來るから」

「気をつけろよ！あの辺りはプレゼントが多いからな。あとギネス挑戦のパトカー」

オネットの街中へ続く道にはバリケードが張っており、パトカーと数人の黒いポリスマン……つまり警察官が無線で連絡を取っていたり、ぶつぶつ偉そうにぼやいていたり、あからさまに驚き慌てている様子が伺えました。

あんまりお近づきになりたい様子には思えません。

ネスは小さく手を振って、男と別れて丘を登り始めました。

「ポーラ、こんな時間に起きてくるなんて……一体どうしたんだい？」

「パパ、見た？凄くたくさんさんの流星が落ちてきたの。きっとその一つオネットに落ちたんだわ」

オネットの隣町、ツーソンのポーラスター幼稚園。その隣に幼稚園を経営する夫婦の自宅がありました。

幼稚園の経営も大変です。子供達が喜ぶ飾り付けをたくさん作らなくてはなりません。

それも月の初めには、飽きが来ないよう季節に合わせた装飾にします。

それだけでなく、もちろん子供達の様子を帳簿につけたり、コミュニケーションノート（お喋り帳、と呼んでいます）のお返事をした

り。
案外几帳面なアレックがそれを担当し、妻は踊りの振り付けや歌を考えるのが主な仕事です。

そんな二人の娘、金髪の巻き毛で碧眼の、目に入れても痛くないほどとても愛らしい顔をしたポーラには不思議な能力がありました。

「パパ、そろそろだわ。そろそろやってくるの」

「……もうすぐ、ネス君が来るんだね？」

ポーラはこくと頷きます。

幼い頃からずっと見てた夢でした。赤い帽子と野球バットの少年、

ネス。

地球を救う力を持つ彼と、その仲間で、一緒に地球を救う冒険に出かけるのです。

道中では何度もポーラは大変な目に合います。それでも、その都度ネス少年は助けてくれました。

夢の話ですから、全てはおぼろげで、詳細は理解できません。それでも、なんとなく分かるのは、きっと大切な夢だから。

ネス、ジェフ、プー。そしてポーラ。

夢の中で皆名前を呼び合います。そして一緒に一つの歌を歌います。それは誰も知らない、誰もが忘れた子守唄。とても温かで、優しく、ちよっぴり切なくて。

ポーラはネスだけが知る、ネスに許された、ネスだけの、地球の歌なのだと思います。

その歌が何を意味するのか、ポーラには分からないけれど。

「ああポーラ！私は寂しいよ！！だが、だがそれでもいかせねばヒーローの父として：しかし：ああポーラああ！！」

アレックは号泣しながら、ポーラの体を抱きしめます。ポーラはその温かさに、安心しました。

ポーラだって、不安じゃないわけがないのですから。

時計の音と、ルームメイトのいびきと寝息が静かに静寂を支配しています。その針はそろそろ、真夜中の2時を指し示す頃でした。

ここはフォギーランドのウィンタース、スノーウッド寄宿舎の一室。ネス達の住むイーグルランドよりも東に位置します。

ジェフは読んでいた本からふと視線を上げました。もう片方の手には、機械の基盤が乗っています。

綺麗に切りそろえた金色の前髪から、遠くに流星が幾筋も光ったように見えたのです。

ジェフは立ち上がり、窓の外を見ます。

（流星、か）

3回願いを唱えることが出来たら、その願いは成就される。ずっとずっと昔から伝わってきた不思議なジンクス。

根っからの科学少年な彼がそれを信じているわけではないけれど。

(……妙な胸騒ぎがする)

普段ならきつと、そのまま彼は参考書を読み続けていたでしょう。

彼は一度集中してしまおうと回りが見えなくなる性質なのです。

でも、そんな彼が、ほんのわずかな一筋の光で集中を切らされるなんて。

(そうだ、何か、聞こえる気がする……。)

本当に本当に小さくて、かすかな蚊の鳴く様な声。何を言っているのか全く分かりません。でも、確かに聞こえている気もします。

(疲れてるのかな)

もう一度ジェフが椅子に戻ろうとしたとき、ポケットから金属の何かが転がり落ちました。

それは、小さな小さな思い出を封じ込めたロケットでした。ジェフはそつと、後ろで眠るルームメイトの様子を伺ってから、ロケットを覗きます。

そこには、まだ喋ることもままならない頃のジェフと、両親が優しく微笑みを湛えていました。

そして、再び閉じると乱暴に机の引き出しの中に突っ込みました。

そこから、更にずっとずっと東に進んだ、チョンモのランマ。

ランマは既に朝を迎えています。

その山の崖で、一人の少年がじつと静かに瞑想をしていました。

そして突然ふっと目を開きました。

「来た」

「プー王子」

「イースーチーか」

プーと呼ばれたその少年が崖の上を見上げると、老人が立っていました。

プーは軽い身のこなしで簡単に切り立った崖を登ると、老人の隣に立ちました。

「とうとうそのときが参りましたか」

「ああ」

「して、如何なされます」

「まだ時ではない。もう少し修行しようと思う」

「ほう、王子がそう言われるとは」

プーは静かに口元を緩めました。

「…なかなか優秀そうなのだ、仲間は。無意識かもしれんが、既に一人は我らに信号を送ってくれている」

本当に微弱で、僅かなそのテレパシーで送信される声。それは確かに、聞こえているのだ。

「そうですか」

「リーやシュン達を頼むぞ」

「弟君達のことでしたらもちろんお任せください」

「…父上と母上は」

「ご安心なされ。元気でやっておりますぞ。そうだ、出発前に王子に差し上げたいものがあると申しておりました。

後に私から用意いたします」

「…そうか、ありがとう」

ネスはがつくりしよげてベットに潜り込みました。

せつかくの夜中の11時に外に出ちゃうなんて大冒険をしたというのに、結局隕石は警察が完全に封鎖していて見ることは叶わなかったのです。

それどころか、あのポーキーに会って自分勝手なことばかり言われたり。

もやもやした胸のうちを思い出しているうちに、ネスはぐっすりとまた夢の中に沈んでゆきました。どれくらい経ったのでしょうか。

たったの数秒にも、数時間にも思えるその時間は騒音で終わりを告げました。

どんどどんど、どんどどんど。

妙にリズムカルで弾みのあるその音は、明らかに家の玄関口から聞こえてきます。

ネス少年は飛び起き、様子を伺いに部屋から出ました。

廊下では、トレーシーがママに泣き付く声が聞こえてきました。

これではきつと、二人が出ることは出来ないでしょう。

ネスは下に下りると、玄関にゆっくり、おっかなびっくり近づきます。

チビはじつと眠る格好をしたまま動きません。

(…カラダのノミに血を吸わせてるんだ、今はね)

言い訳がましく言ってきます。ネスは覚悟を決めて扉を開こうとドアに手を伸ばしたとたん！

「おっせえぞネス！！！」

出ました、あのポーキーです。

危うく扉にぶつかりそうになり、ネスは一步後ろに下がります。

それを招待の明かしと見たのか、そうでないのかは分かりませんがポーキーはあわせて一步前に進み出ます。

「大変なんだよ！何がって何がじゃないよ！！あの隕石のところにピッキーを連れてったらさ、あ、おぼさん、こんばんは。いつもきれいですね、へへへ。」

ポーキーがネスの肩越しに言いました。

ネスもそちらを見るとママがちよっぴり疲れた顔をしながら降りてきたところでした。

「えーと、つまりピッキーを連れてったらさ、警察はシャーク団が暴れてるからってそっちへ行っちゃって…」

だからピッキーがいなくなっちゃったんだよ。警察が悪いんだよ。ぼくは悪くなくってさ。でも、とーちゃんが帰ってきたらおれが怒られるだろ。けつたたき100回だ。

いっしょにピツキーを探しに行ってくれるだろ？親友だってことではさあ。」

ネスは、断然NOと断りたかったのです。でも。これは隕石を見るのにいい口実だと思いました。

もう一度、今度こそ隕石を拝めるのなら、ポーキーのお願いくらい安いものです。

ネスは小さくわかった、と呟きました。

「そうか、友よ！レッツでゴーだぜ！ちゃんとママにあいさつをしてから行けよ！！ねえ、おばさん。」

話をふられたママは、苦笑いを浮かべながら言いました。

「話は分かったわ。気をつけて行ってらっしゃい。頼られるなんてさすがネスちゃん、頼もしいわ！イエーイ！でもすぐに戻ってくるのよ！」

「お前、そんな格好で行くのか？」

「……着替えてくるよ」

「あ、あとバットとか武器になりそうなもんを持って来いよ！ちゃんと装備してくるんだぞ！」

「え、どうして？」

「今外は大変なことになってんだ！つべこべ言わずにもってこい！分かったな！」

「しょうがないな」

ネスはため息をつきながら階段を登り、自分の部屋へ戻りました。パジャマをぱいっとバットに投げ捨て、箆笥からお気に入りのお揃いの縞々のシャツと半ズボンを出して、着替えます。部屋の隅にあった何度も練習用に使っていたオンボロのバットを構えます。

黄色のリュックを背負います。そして仕上げに赤い野球帽をかぶって出来上がり！

ネスは鏡の前でにっこり笑うと、部屋を飛び出しました。

「あ、お兄ちゃん」

「トレーシー」

「また行ってくるの？」

「今度こそ隕石を見てくるんだ！トレーシー大丈夫だったかい？」

「大丈夫よっ　ちよっとびっくりしたただけ。あ、そうだとお腹減るといけないからクッキーあげるね」

トレーシーは赤いスカートのポケットから透明な袋に入ったクッキーを手渡してくれました。

「ありがとトレーシー、貰っとくよ」

「行ってらっしゃい、気をつけてね！」

「ああ！」

ネスは返事をしながら、急いで階段を下りました。

「お待たせ、行こう！」

「……お前、やけに嬉しそうだな」

「そうでもないよ」

「ふーん。あ、お前前歩けよ。俺は殿だ、殿！」

「…分かったよ。じゃ、ママ行ってきます！」

「いってらっしゃい」

そして二人は家を飛び出しました。

星が瞬いています。あれから大分経っていたようで、空の端が薄ぼんやり明るさを取り戻し始めています。

月もゆっくり、ゆっくりと傾き、沈み始めているようです。

「なんか……さっきより断然静かだね……」

町外れの山は、不気味なぐらい静まり返っています。普段なら虫くらのさざめきは聞こえても可笑しくないはずなのです。

それに、さっきの騒々しさと比較するとどうしても音無く聞こえるのでした。

「気をつけろよ！あの隕石のせいだか警察のせいだか知らないけど、山に住む生き物がおかしくなってるんだ」

「おかしく？」

「そう！襲ってきやがるんだぜ！」

「な、なんでそういうこと先に言わないんだよ!!」

「しょうがねえだろっ　なんにでもタイミングつつーもんがあるんだからよ」

「……そうだけど」

そんな不毛な会話を交わしながら、ゆっくりと慣れ親しんでいる山道を登っていきます。

たったさっき登ったばかりだというのに、ほんの少しお日様の位置が、月の位置が変わるだけでこんなにも別世界に見えるのでしょうか。

ひんやりと澄んだ空気はよりいっそう、その雰囲気を高めてくれます。

ネスは喋りながらもどこか緊張したままでした。そのとき。

草むらから突然飛び出してきたのは、緑色のへびでした。

何故かものすごく気が立っている様子で、こちらを睨み付けながら様子を伺っています。

「ポーキー、お前、何かしたんじゃないのか……?」

「ば、ばば馬鹿!　んなわけあるか!!　おらネスさんよ、頼んだぜ!!」

「ええ!?　何言ってるんだよポーキー!」

「俺に獲物はなーい。お前にはあーる。つまりそういうこった」

ポーキーは偉そうな口を利く割に、ネスの背中に隠れてリュックの紐を握り締めたまま離れようとしません。

ネスは力任せに振りますが、それでもポーキーはくつついてきます。へびは突然飛び掛り、噛み付いてきました。ネスはそれを咄嗟に避けますが、後ろの誰かさんのせいで上手く動けず、転びそうになります。

「ひいひい悪いのはネスなんですネスなんです本当です」

ポーキーはどうしてもネスを盾にするつもりです。背中が重くて重くてしょうがありません。

ああくそ！どうしてこうなんだよ！！

ネスは額に滲んだ汗を拭うと、邪魔なリュックを放り投げ、また向かってくるヘビに、がむしゃらにバットを振りかぶりました。

「あっちへ行け！！行けてんだ！！」

かつん、運良くバットの先がヘビにぶつかり、ヘビは大人しくなりました。

たったこれだけの、数分の出来事だったのにネスは既に息が切れています。

運動神経が悪いわけではないはずです。慣れない出来事に、大荷物があつたものだから、必要以上のエネルギーを消費してしまったようです。

「ああびっくりした。別に怖がってたわけじゃないぞ！おいネスしつかりしてくれ、頼むぞ！」

ふー、とため息をつきながら、ポーキーの態度は相変わらず尊大です。

それでも付き合っただげる己の懐の深さに、ネスこそため息をつきたいぐらいでした。

ネスは無言で山を登ります。ポーキーは紐こそ握らないけれども、さっきよりも随分ネスに引っ付いている割合が高くなった気がします。

道中何度か犬やカラスに襲われ、それを退けながら、何とか山頂近くにやってきました。

そこには、小さな青い小屋がありました。そして扉の前に、男が一人立っていました。

「やあネスちゃん。ちょいと聞いて欲しいことがあるんだがね」

「どうしたんですか、ライヤーさん」

サイドの髪をくると跳ねさせ、黒丸サングラスをかけた、青髭の濃い男、ライヤー・ホーランド。

彼はいつも忙しいといつては、誰にも話したくない秘密をこっそりネスにだけ教えます。

ここに越してきたのは何か大きな宝物を見つけるためだとか。

でも正直、ライヤーの言っていることに信憑性があるのか、ネスには判断しがたい問題であったので、いつもライヤーの自由にすることにしていました。

今回も、ライヤーはポーキーの様子を伺い、聞こえないようネスの耳にそっと耳打ちするのでした。

その息は、ニンニクのあの嫌な臭いが混じっていて、ネスは思わず顔をしかめます。

「ニンニク食べて頑張ってたらね、凄いものを発見しちゃったんだよお、ネスちゃん」

その瞳は、禍々しく不気味に輝いています。それは欲に取り付かれた人間の、そうポーキーの両親、アンブラミやラードナーと同じような輝きを湛えていました。

「見においで」

「でもライヤーさん」

ネスはちらりと後ろを見やります。

「ぼくポーキーと隕石を……いや、ポーキーの弟を見つけに行かないといけないんだ」

「どーしたんだネス」

名前に反応したのか、ポーキーが話題に割り込んできました。

「呼んだか」

「……仕方ない、一緒に見せてやるよ、ミンチのぼっちゃん。すんごいお宝を見つけたんだ」

「すんごい!？」

ポーキーの目が爛々と輝きます。

きっとそれは、さっきのライヤーさんの目と似たものなのでしょうが、そこに子供の純粋さが混じり、とてもきらきら輝いていました。

「見るぜ!おいネス、行くぞ!」

「でも…ピッキーは……」

「なに、行ってすぐ帰ってこれば大丈夫だって早く早く」

ライヤーが小屋（多分家ではないと思います）の扉を開き、二人を誘導します。

ポーキーは嬉々として招待にのっかり、家に入ろうとします。

ネスは今度こそため息をついて、二人の後に続けました。

小屋の中はオンボロもいいところ。あちこち穴だらけで、少し歩くだけで軋む音がします。

埃まみれで、どこからカビやらニンクやらの臭いもします。

ベッドはスプリングが飛び出し、寝れる様子はありません。

こんなところでライヤーさんは生活していたのでしょうか。

そして床のど真ん中に、大きな穴が開いていて、其処に梯子が下ろされています。

「地下室を見せてやるよ。おれがただのホラ吹きだって思ってるだろう、お前。いいよ。びっくりさせてやるからな」

何も言っていないのに勝手に話を進めています、ネスは黙って梯子を降りました。

ポーキーはその深さにちょっと怖気づいたらしく、ネスが降りるのを暫く見ていましたが、勇気を持って降りてきました。

地下室はライヤーが掘ったままの姿で、土と水の湿った匂いだけが漂います。

中は真っ暗で、何も見えません。ただ梯子を掴む両手と、足をかける感覚だけがそこにはありました。

どこかでぽたん、ぽたん、水が落ちている音も聞こえます。

ライアーさんは先導して、懐中電灯で道を照らしました。

ずっと光がなぞった場所に、シヨベルやヘルメットなんかが放置してあるのが見えました。

ネスはその光を頼りに、そっと足場の辺りに足を下ろしました。

「ほーんとにこんな真っ暗な場所にあるのかよう」

ポーキーは既にビビっています。

ライアーは無言で壁により、スイッチを入れました。

天上に数m感覚で豆電球が備えて合ったのです。一斉に明かりがつ

き、なんとか道が見えるようになりました。

「こつちだ。あんたらだけの秘密だぜ。ミンチの坊ちゃんは今回これっきりのこれっぽっちの特別大サービスだからな」

竪穴から、横穴に変わります。頼りない豆電球では、足元は何か見えるくらいです。

どきどき。不思議な大冒険の感覚に、ネスはちよっぴり興奮を覚えました。

そして、長く長く続いたかと思ったその洞穴は、あっさりと終わりを迎えました。

その突き当たりには、遠くからでも分かるくらいの不思議な感覚がありました。

ライヤーは「それ」に向かって懐中電灯の光を当てます。
ピカ！

余りの鋭い反射光に、思わずネスは一瞬目を瞑りました。

そして何度か瞬きした後、ネスはもう一度それを見つめました。

黄金の、不思議な形をした、大きな大きな像でした。

あの、ライヤーさんの不気味な瞳の輝きと、同じような得体の知れない、腹の其処から湧き上がってくる嫌な感覚があります。

それはぐるぐるとカラダを駆け巡ると、頭の中にどっと流れ込ん

で、鋭い刺激を送りつけるのです。
軽い眩暈と頭痛が拒否反応で起きます。ずん、とカラダが重たくなる気がします。

そして、何か。嫌な感覚に支配されそうになります。

マイナスな思いが溢れかえりそうになります。

ネスは思わず頭を振りました。

「きつとまだまだお宝はあるぞオ！俺にはまだまだニンニクがあるからな。まだまだ頑張るさ。」

何せおれはやるるときやる男だからね。この小説が終わる頃にはヒーローになってるかもしれないぞ！

…じゃ、仕事の邪魔になるから帰ってくれ。よからぬコトを考えな

いとも言えないしな。」

なるほどその心配は、主にネスの後ろにいるぽっちゃり少年に、大いに当てはまりそうです。

「嫌な感覚」を覚えたネスとは対照的に、口元をにんまり曲げてその像を眺めているのはポーキーでした。

しかし、その目はどこか薄暗く、ほの暗い光がやんわりとのつています。

「ほら行くぞポーキー。ピツキーを探しに行くんだろ」

「……お、おー……」

ポーキーは半ば引き摺られるようにして、ライヤーの秘密の洞窟から抜け出させられるのでした。

ライヤーの小屋から頂上までは、ほんの少しぐるっと登るだけでした。

まだポーキーはぼうっとしていましたが、暫く歩いたところで目が覚めたみたいでした。

そして、ネスはやつとのことで隕石を拝むことが出来ました。

「うわぁ……!」

直径何十メートルにもなる大きさの穴の中央に、それはおどろおどろしく、かつ神秘的な光を携えていました。

未だ赤く燃え、黄色になったり、緑になったりしています。

でも、ネスが思っていたのよりも随分と小さな隕石でした。

だってあれだけの音に、これだけの穴を開けたんですもの、それくらい大きな石だと思うでしょう。

けれどネスは、この星のかげらに思いを馳せました。

これだけなのに、未だにこんな風に光っているなんて。こんな穴を開けたなんて。

なんてすごい力を持っているんだろう!

ネスはもっと近くで見たくまりました。ぽっかり開いた穴の中に、降りようとしたとき

「ネス！」

ポーキーが叫びました。

「ピッキーがいたぞ！」

「ピッキー！？！」

ネスは慌ててポーキーの元に駆け寄ります。

「ん？ ふわぁ……なんだ、ポーキーかぁ」

「ポーキーじゃない！」

「だってポーキーったら、怖がっていなくなるんだから。随分探したんだよ？ ま、無事でよかったよ。」

さ、帰ろう。親も心配してるぞ。全くどっちが兄貴だかわかりやしないよ」

「う、うわ……そんな時間かぁ」

「そりゃ、もう帰ってきてるはずだよ……」

「あーあ、ケツ叩き100回かぁ……くそう、お前のせいだぞ！ ネス！」

「え、ぼく！？」

「ん？ ネス、ブーンブーンってカブトムシが飛んでるような音聞こえないか？」

「え？ いや……」

「聞こえろよオ！」

そのとき、隕石が不思議な光を放ち始めました。そして、不思議な音がします。

なんだか、温かいような、優しいような、それでいて切ないような……。

そして、突然カブトムシが飛び出し、ネスの回りをブンブーンと飛び始めました。

「~~~~~~~~！！！」

「——————！！！」

それは明らかにカブトムシから聞こえます。でも何なのかよく分かりません。

「わしはカブトムシではない！！うむ、分かるか？」

「え、あ、うん」

「適宜の言語システムが分からなくての、すまぬな。これで合っている、と。よしよし。それでは今一度。おほん。

わしはカブトムシ、ではない！10年後の未来からやってきたもの、じゃ！

未来はもう惨たんたるありさまじゃ！ギーグという銀河宇宙最大の破壊主が何もかもを地獄の暗闇にたたきこんでしまったのじゃ！

しかしじゃ、わしのいる未来に不思議な言い伝えが残っているのじゃ！

「少年がそこにたどり着くならば、正しきものは光を見つける。時の流れは悪夢の大岩を砕き、光の道ができる」……とその少年がネス！あんたなのじゃということが、わしのするどい直感でわかったのじゃ！

ギーグの悪の計画は、もうすでに地球の一部におよんでいるはずじゃ！今すぐに戦いを始めれば間に合うはず、じゃ！！
大切なのは知恵と勇氣、そして仲間たち。……言い伝えでは3人の少年と1人の少女がギーグを倒すという。」

「ちょ、ちよつと！ちよつと待てよ！な、なんで僕がネスだって分かったのさ！？」

「そこはきちんと……その壊れた宇宙船がしっかり記憶しておる。時空間目標の座標もばっちりネス少年に合わせた。

じゃからこうして君の元に落ちてきたというわけじゃ！」

「……話が飛びすぎてワケわかんないよ……。ギーグは既にここにいるわけ？」

「ああ。見たろう、心の荒んでしまった生き物達を！ あやつらはギーグの発する悪の波動によって悪しき心を増幅させられておるのじゃ。

このままではああいう生き物達だけではない。善良な人間たちですら荒んでしまうのじゃ！」

「…ネス、随分面倒なことに巻き込まれたみたいだな」

ぽつんと後ろで突っ立ったままだったポーキーが呟きました。

「三人の少年って…俺も入ってるのかなあ…：イヤ、だなあ…。」

それには、ブンブーンは答えませんでした。

「…とりあえず早くうちに帰ろうぜ。SFみたいな話は後にしてさ」
ピッキーが言います。ネスは頷きました。

帰り道は驚くことに暴れていた生き物達と全く遭遇することなく家の前まで戻ってきました。

下り道でもあったので、行きよりも随分楽です。

「先にポーキーの家に行かなきゃね」

ネスが分かれ道を、ミンチ家のほうへ向かおうとした、そのときでした。

「危ない！」

咄嗟にブンブーンが叫び、ネスの体を不思議な光が包みます。

そして、その直後、突如炎がネスを襲いました。なのに、全然熱くも痒くありません。

「久シブリダナ、ブンブーン」

光がネスの目の前に下り、そこに銀色のストレッチスーツのようなものを来た、宇宙人らしき者が現れました。

「ギーグ様ノ計画ヲ邪魔スルコトニ、オマエハ昔カラ熱心ダッタ。

シカシ…ブンブーン、モウアキラメロ。オマエハ 英雄デハナク

タダノムシケラナノダ！タタキツブシテヤル！」

「な、なん、なんなんだよっ 一体！！」

「スターマンの息子じゃ！未来からわしを狙ってやってきた殺し屋じゃ！」

本来ならば楽天的で能天気なところのあるネスですが、余りに現実から離れた現実、流石についてはいけないようです。

それでも唯一つ分かることは、このまま放っておけば自分達の命が危ないこと！

ネスはバットをしつかりと構え、目の前の大きな敵に立ちあがり

ました。

正直、とても恐ろしいです。手が震えます。足が音を鳴らします。だってこんな不思議な連中と殴り合いの喧嘩なんてしたことがあります。ません。

そして、そこにあるのは真剣な命の奪い合い。

でも。負けるわけには、行きません！

ブンブーンが一生懸命小さな体全体を使って体当たりをしています。出来るだけネスたちに攻撃や狙いが向かないよう、必死になってくれているようです。

あの、特別な力を持つとはいえ、カブトムシのブンブーンが。

ピッキーも勇気を振り絞って小石を投げつけたり、枝を拾って応戦しています。

これを放っておけるほどネス少年の心はひねてはいません。

ネスは全身全霊の力を込めてバットを振りかぶりました。

カッン、とても硬い音がして、余り攻撃を当てられてはいないようです。

その衝撃に一瞬動きが止まったネスに向かい、もう一度宇宙人は不思議な力で炎を起こし、攻撃します。

だが、まだシールドの効き目は残っているようで、炎はネスの目の前で掻き消されてゆきます。

ネスの勇気が引っ込みそうになるのを必死で押さえ込み、バットを構えなおします。

もう一度、次こそは！！

S M A A A A A A A A A A A A A A S H ! !

確かな手ごたえです。けれどそれでも相手にひるむ様子はありません。

「小ザカシイ奴等メ！！ダガコチラニモトツテオキガアルノダ！」
突然スターマンの息子は精神集中を高め、一気に強い力を呼び出します。

「P K サンダー！！」

カッとスターマンの息子の両手から光が迸ります。

光は天を貫いたかと思うと、雷となって一同を襲い始めます。

ピカッ、ゴロゴロ!!

ちように寝返ろうとゴマをすっていたポーキーの真後ろに小さな一発目が落ち、ポーキーはしりもちをついて泣きべそになりました。

「お前、そんな技まで見につけてきたのか!!」

「フン、オ前ガシルド好キナノヲ知ラナイ者ハ我が軍勢ニハイナイノサ」

ピカっ! 次の光は、なんとネスの真上に来て:

「ネスっ危ない!!」

ネスは横からすごい力に押され、その場に倒れこみました。

「うあああああっ」

そして、二発の雷が、連続して宙に浮く、小さな少年を貫きました。

「ピッキいいい!!」

ポーキーが泣きそうな声で叫びます。

ネスは思わず声すらも出せませんでした。

ピッキーは、ネスの隣で雷に打たれ、白目をむきながら痙攣しています。

「あ…あ………ピ、ピッキー……!! ごめんよぼくのせいで、ぼくのせいで……」

「うおおおおおっ!!」

ブンブーンが全身全霊をかけた体当たりを決めました。

後ろでポーキーが石をやたらに投げつけます。

鋭い音がして、スターマンはうめき声を上げています。

「ピッキー…ピッキー頼む……もう一度元気になってくれ……ピッキー……!!」

ネスはピッキーを抱きしめます。どうしたらいいのか分かりません。ただひたすらに、がむしゃらに祈り続けました。すると。

ネスの手に、仄かに暖かな光が宿ります。

「これは…」

「ヒーリングじゃ、ネス！すぐそれをピッキーに！！」

ネスはただひたすらに祈り続けます。ピッキーが元に戻るよう、元気が戻るように。

そしてネスから生まれたその光は、ピッキーを優しく包み込みました。

すると！

「あ、あれ、ネス……ぼく……」

「ピッキー……！？よ、よかった……これは……」

鈍い音がして、ぴかぴか点滅すると、スターマンの息子は消え去りました。

ブンブーンが戻ってきます。

「サイコヒーリングじゃよ、ネス。それはネスに元々備わっていた特別な力じゃ。それが今になってやっと開花したのじゃ。」

「……と、とりあえず早くうちに戻ろうぜえ……あー怖かったあ……ピッキー！大丈夫かあ！？」

「う、うん。なんともないよ」

ネスもポーキーの意見には大賛成でした。どっと疲れが溜まっています。

すぐ目の前の家に、駆け込むようにしてネスは入りました。

「こんばんわ……」

ネスは遠慮がちに家に入ります。二人も恐る恐る家に入ります。

しかし、しっかり両親は帰宅していました。

「んまー、あんたたちったら！こんな時間までどこほつき歩いてたのさ！！おしおきだよ！！」

「ひい、勘弁してよかーちゃん……！！」

「ゆ、許して……！！」

「やあネス君。うちの糞ガキどもがどれくらい迷惑をかけたみたいですまなかったね。二人ともおしおきだ」

「嫌だあああ……」

「うわああん」

二人は逃げるようにして二階に上がっていきませんが、その先に逃げ道があるとは到底思えません。

それを見越して追うように、ミンチ家大黒柱のアンブラミさんもゆつくりと上がっていきます。

その後、姿が消えた後に聞こえたのは、とても聞きたいとは思えない、痛々しい音と怒鳴り声と泣き声でした。

その声を聞いても全く動じない様子で、ラードナはネスに向かって言いました。

「うちのひとのお人よしにはほーんと呆れるネエ。あんたん家、はやく立ち退いておくれよ。一体どれだけの金を貸してると思ってたんだい。」

正直者はほーんと損してばかりだわ」

そんなの、知ったことじゃない。ネスは思いました。

大体借金を吹っかけてきたのはアンブラミさんの方だと聞きます。

ネスは黙ってその場を去ろうとしました、が。

「なんと性悪な夫婦じゃのう！ったく…」

ネスの代わりにブンブーンが文句を言ってくれていました。

顔をよく見ようとしたのか、ラードナの方へと近づきます。

「…キィイイー！！小うるさい便所バエだよ！！死んで地獄へ行け！！」

ばちん！！！！

それはとても軽い音でした。

ちよっと手を叩けば、同じような音が出るでしょう。

ちよっと物を落とせば、同じような音が出るでしょう。

あのとてつもなく恐ろしい宇宙人を退けたカブトムシが、本当に呆気なく倒れました。

それなのに、こんなに小さくて軽い、ごく日常生活に溢れるような音で、いいのでしょうか。

「ブンブーン！！！！！！」

ネスは駆け寄ります。

「フンッ あんたん家の虫だったのかい。放し飼いにするなんてないんて悪趣味なんですよ」

ラードナの嫌味も、ネスには届きません。

あんなに勇敢に戦ってくれたブンブーン。本当に一緒に居たのは数分のことでしたが、ネスにはとても大きなものに感じました。

「う、う、思ったよりもずっと、ずっとかなり…わしは弱かった。

しかし、あんたはわしにかまわず冒険の旅に出るの、じ…や…。あつ、そうだ！遺言を聞いてからゆけ！」

ネスは静かに頷きます。

「ギーグを倒すには…地球とお前の力をひとつにすることが必要なのじゃ。この地球には、お前のパワーを揺り起こし、強めてくれる…「お前だけの場所」が8箇所ある。そこをすべて訪れるのだ。

そのひとつの場所はこのオネットにある。「ジャイアントステツプ」と呼ばれている場所、じゃ！まずそこへゆけ！ネス！わかったか？」

「…分かったよ」

「そうか。ものわかりの良い子、じゃ。では…ああ、苦しい。死にそうだ…うつつ。し、しかし、わしが死ぬ前にこれを渡しておかねばなるまい。

「音の石」じゃ！地球上に8箇所ある「お前だけの場所」の…音をしみこませるグレートなアイテムじゃ。うれしいじゃろう。」

ネスはその不思議な石をそっと受け取りました。ちよっぴり緑っぱいだけで、何の変哲もない、ただの石ころです。

きつと川岸に置いてあれば、誰も気がつかないでしょう。

でも。それを耳に当てると、かすかに何かの音が聞こえます。メロディーはありません。

そこにあわせるためのリズムが、やってくる「音」を今か今かと待ち構えています。

本当に音の石なのだと、ネスはすっかり理解しました。

窓からゆつくりと、明るい日差しが漏れ始めています。

ブンブーンは少しだけ手を動かして、その光を浴びました。

「もう外は夜明けになったのう：死んでゆくわしには関係ないこと、じゃ：」

ネスは動かなくなったブンブーンを両手で抱きしめて、ネスの家の庭に埋めました。

「ネス」

すると、ママがその音に気がついたのでしょうか、玄関から出てきました。

「お帰りなさい。随分遅かったわね」

「……ママ、あのね」

「…話があるの？ネスちゃん。こんなところじゃなんだし、一度うちに入りましょう」

ネスは頷きました。

そして、家の中のリビングであつたことを説明します。

ママは黙って頷きながら静かに聞いてくれました。

「そう、ネスちゃん。大変だったのね。ママは嬉しいわ」

ネスはちよっぴりびっくりします。放任主義で明るいママだって、流石にこんな話はお呼びではないと思っていましたから。

「よその人は何て言うか知らないけど。ママの目にはとてもたのもしく見えるわ、ネスちゃん。イエーイ！ファイト！ファ・イ・ト♪

ママは何時だって応援してるわ、頑張ってね」

「…うん！」

「でもねネスちゃん」

ママは椅子から立ち上がり、そっとネスを抱きしめました。

「疲れたり、寂しくなったらいつでも帰ってらっしゃい。ママはずーっと貴方の帰りをまっていますからね」

「あたしだって！」

（ボクも、たまには）

見ればトレーシーも、チビも起きてきました。

「あたし、お兄ちゃんの冒険精一杯お手伝いするから！」

ネスは、家族の顔を見つめて、力強く頷きます。こみ上げてくるものを抑えて、ネスは振り返りました。

「ママ、みんな、行って来る！」

「いってらっしゃい！」

ネスは見えてはいませんでしたけど、このときのママの笑顔は天下一品の美しさを誇っていました。

そして、ネス少年は旅立ちました。

まず目指すはオネットジャイアントステップ。

だんだんとネスの胸は高鳴り、早まっていきます。

地球を救う旅だなんて、ちょっぴりカッコいいんだから仕方ない！

Let's save the world!

トモダチ

怪しい黄金の像を見たたん、ポーキーの回りの世界が一気に真っ暗闇に埋め尽くされました。

ポーキーは慌ててネスの名前を叫びます。いつも通り、ちよっぴり偉そうに。

ですが、返事はありません。

そうしているうちに、薄ぼんやりと目に映り始めたのは、光でした。びかびかと光る銀色の光。それは何かを反射する、目に痛い光。

「どうしちゃったんだよオ、俺……」

そのうちに声まで聞こえてきます。

「マ……マリ………」

金属で出来たような、冷たくて、それでいて物悲しい誰かの声。

それは誰のものか、すぐにはつきりしました。

いつの間にかポーキーは真っ白な空間にいました。よく目を凝らせば窓があって、外が宇宙であることを示しています。

彼方此方に見たことも無い機械のスイッチやレバーがあって、全然分かりません。

それでも、ここが宇宙船の中であることはポーキーにも理解が出来るしました。

そしてそのだだっ広いだけの船の中の中央に、たくさんのコードが繋がるガラスの試験管のようなものがありました。

試験管はとても大きく、まん丸子豚みたいなポーキーでさえすっばりと入ってしまいそうです。

緑色の液体でたっぷり満たされています。

その中に、ひよろっこい生き物が膝を抱いてうずくまっています。緑色の液体のせいで緑に見えますが、きっとそいつは白か、銀色です。

「な、なんだ……!？」

<マ、マ……リア……マリア……>

どうやらこの声は、この生き物から発せられているようです。

「マリア……？」

<マ……リ……マ、ママ……マ……マ……！！>

突然赤ん坊が痙攣を起こすように、その声は一気に甲高く、耳障りな音へと姿を変えました。

「まさか、宇宙人の……赤ちゃんなのか！？」

空間は一気に捻じ曲がります。その生き物を中心にぐうんと渦を描き、飲み込まれていきます。

そこに、様々な人が一緒に飲み込まれていきます。

「お、おいっ！！」

ただ、ポーキーと、その生き物だけが無事でした。

「ど、どうしたらいいんだ」

ポーキーが慌てふためいていると、不思議な音色が聞こえてきます。それは温かで、優しく、ちょっぴり切ない不思議な歌。

子供達が数人、歌っているようにも聞こえます。

それが聞こえた瞬間、空間は動きを止めました。たくさんの人々も動きを止めます。

<マリア……寂シイ……マリ……ア……>

「さみしい……？」

<ウン……寂シイ……。オ前ハ……私ノ中ニイルノカ>

「わかんねえよ！全然！！」

<トモダチ……>

「友達……？」

<私ハ、寂シイ。トモダチガイレバ、ソウナラナイ>
生き物はふつとビジョンを映し出します。

二人の男の子と、一人の女の子。

生き物が出す絶望的な力を前にも、三人は励ましあいながら立ち続けます。

歌い続けます。

「……俺は」

<私ノ名前はギーグ>

「…おれは、ポーキー」

<ポーキー。オ前ハ、私ノ、友達？>

「……なつてやつてもいいぞ」

<ソウカ>

「……」

<ポーキー。一緒ニ友達ヲ増ヤソウタクサン増ヤシテ増ヤシテ増ヤスンダ。ソウシタラモウ寂シクナクナル。

コウヤツテ泣クコトモナクナル>

「おれも……寂しくないかな。あいつと……また一緒にやれるかな」

<大丈夫ダ、ポーキー>

<ポーキー>

<ポーキー>

「!? どうしたんだよ」

突然世界が反転します。ギーグは真ッ暗闇の中に消えていきます。

「待てよ、おい、どこいくんだ」

<ポーキー、待ッテル。ココニ来テ>

「おい、待てよギーグ!!」

<ポーキー>

<ポーキー>

「ポーキー!!」

ポーキーは、ネスの声に呼び戻されました。

そして引き摺られながら洞窟の外へ連れ出されている自分に気がつききました。

ポーキーはぼんやりと、ギーグを思い出します。

そして、ネスに気付かれないよう静かに口で弧を描きました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0416j/>

MOTHER2 - Let's save the world -

2010年10月10日07時57分発行